

# 中東問題を観る眼

朝日カルチャーセンター・新宿教室

若林 啓史

## 講座の全体像

第1回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その1：ゾロアスター教

第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その2：ユダヤ教

第3回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その3：東方キリスト教

第4回 イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？ 中東の多数宗教・イスラーム

第5回 中東は部族社会？ 中東の社会構造 その1

**第6回 中東は宗派で分断されている？ 中東の社会構造 その2**

第7回 中東は男尊女卑？ 中東とジェンダー

第8回 中東の国々はどこも産油国？ 石油問題と中東観のかたより

第9回 中東に民主主義は根付くのか？ 中東民衆の政治参加

第10回 イスラエルと湾岸アラブ諸国は手を結ぶのか？ 中東の新たな対立構造

第11回 日本外交における中東の重みは？ 中東外交の黄昏

第12回 なぜ日本の中東論文は英語で書かれるのか？ 戦後日本の中東研究

## 【中東地図】



## 第6回 中東は宗派で分断されている？

### 中東の社会構造 その2

2023年6月22日



写真 アラブの使節に宝物を見せる東ローマ皇帝レオン6世 12世紀の写本

東ローマ帝国のヨハネス・スキリツェスは、811年から1057年までの出来事を記述した年代記『歴史概説』を著した。12世紀、シチリア島で作成された『歴史概説』の挿絵入り写本は、現在、スペイン国立図書館に所蔵されている。写真は、レオン6世（在位886-912）が、首都コンスタンティノープルのハギア・ソフィア大聖堂を訪問したアラブの使節に、黄金の聖杯など宝物を見せている様子である。東ローマ帝国とイスラーム世界は、覇を競う一方で、宗教の違いを超えた交流を行っていた

#### 1 中東における宗教・宗派

- 中東で紛争が発生すると、直ちに「この紛争は、宗教・宗派の違いが原因である」と解説する論者が現れます
- たとえば、イスラエルと周辺アラブ諸国の紛争やパレスティナ問題を巡っては、それがあたかも「ユダヤ教とイスラームの因縁の対決」であるかのように説かれます
- その発想が、「イスラーム世界のユダヤ教徒は迫害されている」という実態から離れた認識を呼び、他宗教と長年にわたって共存してきた中東のユダヤ教徒を、自国に移住させるイスラエルの政策を正当化しました
- あるいは、イスラームにおける、「スンナ派」「シーア派」という宗派の違いは、「シーア派三日月地帯」脅威論者が強調するように、常に政治的対立に直結するのでしょうか？
- 中東に、様々な宗派共同体が温存されているのは、この地域で遠い過去の時代より、信条の違いを超えて、人々が共存してきた証に他なりません。
- それでは、多様な人々の共存が脅かされたのは、どのような状況においてでしょうか？





写真 エルサレム「聖墳墓教会」の鍵を管理するムスリム 2018年2月26日撮影  
聖墳墓教会は、十字架の跡とイエスの墓の上に建設されたとの伝承があり、キリスト教徒にとって最も重要な聖地の一つである。教義や典礼の違いによりキリスト教に諸宗派が生まれると、各宗派は聖墳墓教会の管理権を主張、激しい争論を巻き起こした。時の流れと共に、各宗派は聖墳墓教会の各部分の管理権を分け合う妥協を行い、新たな変更を認めない「現状維持」方針が成立した。各宗派が、教会堂の壁や床のどこを清掃するか、厳格に定められ、全宗派の合意なしには、梯子一本動かすことも許されない。教会堂全体の鍵は特に重視され、1289年以来、争いを防止するため特定のイスラーム教徒家族が保管している

## 2 歴史にみる宗教・宗派共存の構図

- 中東の少数宗教や、イスラームの回で説明したように、イスラームは征服地のユダヤ教徒とキリスト教徒を「啓典の民」として社会に組み込みました。また、ペルシアのゾロアスター教徒、インドのヒンドゥー教徒や仏教徒とも共存しました
- イスラーム諸王朝には、理論面ではともかく、実際面では征服地の統治にあたり、他宗教に手を出さない慣行が存在しました
- 中東地域に興亡した諸帝国は、古代オリエントの時代からオスマン帝国やペルシア帝国まで、支配地域のさまざまな宗派や民族を、ありのままに引き継いで統治しました
- 特に、現在のレバノン、シリアやイラクなどの山岳地帯には、マロン派、ドルーズ派、アラウィー派、アッシリア教会（ネストリウス派）など歴史的経緯から発生した少数宗派が身を寄せ、生き残ってきました。中東は、生きた宗教の博物館と考えられます



写真 「大レバノン」発足記念式典 1920年9月1日撮影

1920年4月、英仏を含む第一次世界大戦の戦勝国は、サン・レモ会議において「シリア」をフランスの委任統治下に置く決定を行った。シリアの民族主義者は抵抗を試みたが、フランスは軍事力を用いて支配権を獲得した。フランスは、直ちにシリアの分割に着手した。1920年9月、オスマン帝国時代から特別県になっていたレバノン山地方に、ベイルートとベカア高原などを加えた「大レバノン」をシリアから分離し、独立の施政区域とした。写真は、その時の記念式典の様相である。中央には、仏レヴァント軍司令官アンリ・グロー將軍、その左にマロン教会総主教イリヤース・ブトロス・アルフワイク、右にベイルートのムフティー（大法官）ムスタファー・ナジャーが着席した。フランスは、宗教指導者を「大レバノン」住民の代表とみなしたのであった

### 3 「東方問題」という転換

- 19世紀の欧州列強は、衰退しつつあるオスマン帝国などへの影響力拡大を競い合い、これを「東方問題」という枠組みで処理しようとした
- 「東方問題」は、単にオスマン帝国などを舞台とする列強の勢力争いという側面のみならず、「東方」における宗派や民族の共存に列強がくさびを打ち込み、「東方」の社会を分断と解体、不断の抗争に導く側面がありました
- たとえば、オスマン帝国支配下の「歴史的シリア」では、イギリスがドルーズ派とユダヤ教徒、フランスがマロン派、ロシアが正教会信徒に対する保護権を主張しました。これらの少数宗派は、オスマン帝国臣民でありながら、列強が提供する物質的・政治的利益に誘導されて代理勢力となり、列強間の対立が現地における宗派抗争と化しました





写真 ベイルートを分割する「グリーン・ライン」のクリスマス 1987年12月23日撮影  
1975年2月、レバノン内戦の発端となる紛争が始まった。内戦は宗派間抗争の様相を呈し、左派ムスリム民兵は、次第にキリスト教徒民兵をベイルート東部に追い詰めていった。ベイルート市街を東西に分ける道路は、「グリーン・ライン」の名で宗派勢力間の境界線となった。写真は、レバノン軍のムスリム兵士が、キリスト教徒兵士と共にクリスマスを楽しむため、「グリーン・ライン」上にクリスマス・ツリーを設置している場面である。内戦は紆余曲折の経緯をたどり、1991年3月、ようやく終結した

#### 4 「東方問題」の克服と社会再統合の試み

- 列強は、オスマン帝国内の特定の少数宗教・宗派を自国の代理勢力に選び、これへの保護権を名目に介入を図りました。そのため、「東方」は、列強から「宗派社会」ないしは「モザイク社会」と認識される傾向にありました
- これに対し、オスマン帝国の側では、1839年よりタンズィーマート改革と呼ばれる国家の近代化に着手しました。改革の一環として、それまで宗派別に統合していた社会制度を改め、ムスリムと非ムスリムの平等化を図りました
- オスマン帝国は、改革により、少数宗派保護を口実にする列強の介入を防止しようとした。しかし、長年の優越的地位を脅かされたイスラーム教徒の反発を受け、また、列強の代理勢力として振舞う少数宗派に対し、ムスリム民衆による加害事件が発生しました
- 19世紀後半には、欧州から浸透した民族主義が、オスマン帝国の諸民族に影響を与え、バルカン半島などでは独立運動に発展しました
- オスマン帝国のアラブ地域では、新たな社会統合理念の模索が始まり、「アラブ」という世俗的理念や、「イスラーム」の再活性化など、いくつかの潮流が生じました





写真 アメリカにより設置された「イラク統治評議会」 2003年7月13日撮影  
ブレイヤー米大統領特使兼イラク施政官は2003年7月13日、「イラク統治評議会」を設置した。評議会委員にはイラク人25人が任命され、うちシーア派は13人、スンナ派とクルド人は各5人、トルクメン人とアッシリア教会のキリスト教徒は各1人であった。シーア派は、イラク独立以来初めて人口構成に見合った公職配分を受けた。スンナ派は、少数宗派の扱いに甘んじた。イラクは、宗派別に権力を分け合う体制に移行した

## 5 植民地体制への組み込みと分割統治

- 19世紀、欧州列強の影響力が強まった一方、オスマン帝国やカージャール朝ペルシア帝国は衰運期にありました、第一次大戦後には、中東地域全体が列強の事実上の支配下に置かれました
- 列強、特に中心的役割を果たした英仏は、中東地域をそれぞれの勢力圏に分割、さらに自らの勢力圏を、人工的に引いた境界に従って分割し、現在の中東諸国の原型を作りました
- 宗主国は、植民地の宗派・民族構成に着目し、支配しやすくするために社会の分断を図りました。さらに、特定の社会集団を植民統治を補完する代理勢力に選び、権力を与えました
- たとえば、フランスはシリア地方を委任統治領にすると、これを「シリア」と「大レバノン」に再分割しました。「大レバノン」では、長らくフランスの代理勢力を務めていたマロン派が優遇されました。イギリスの代理勢力だったドルーズ派は、「大レバノン」では冷遇されました。代わりにフランスは、「大レバノン」のスンナ派イスラームを取り込み、さらにはレバノンの公職を宗派別に固定配分して、支配体制の永続を試みました
- イギリスは支配下のアラブ諸国を王制に誘導し、「部族」勢力に公権力を与えて王制を支えさせました。また、イラクでは、王制と「部族」に加え、英空軍に「アッシリア部隊」を編成して、イラクの少数宗派アッシリア教会の信徒を、代理勢力にしました



写真 カイロのコプト教会総主教座を訪問するエジプト大統領 2015年1月6日撮影  
エジプトのキリスト教徒のほとんどを占めるコプト教会信徒は、公式推定で全人口の10-15%に相当するとされている。コプト教会信徒は、比較的教育水準が高く、行政分野や商業で成功した者もある。イスラーム教徒との関係は基本的に良好であるが、時として一部の過激化したイスラーム教徒の攻撃対象となることもあった。特に、2011年1月1日にはアレキサンドリアのコプト教会で23人が死亡する自爆攻撃があり、社会不安が否が応にも高まった。この事件は、エジプトでムバーラク政権が倒れる「アラブの春」の伏線の一つであった。ムバーラク退陣後、短期間ムスリム同胞団が政権を握ったが、2013年7月には国軍によるクーデターが発生した。2014年5月の選挙で大統領に選出されたスィー・スィーは、コプト教会のクリスマス前日に当たる2015年1月6日、総主教座を訪問して宗教間の融和を演出した

## 6 アラブ・ナショナリズムと「宗派主義」

- 第二次世界大戦後、中東諸国は独立しました。中東地域の民衆は、宗教・宗派の違いを政治的対立に結びつける「宗派主義」が、社会の分断を招き、隣人間の抗争に発展した過去を反省しました
- アラブ・ナショナリズムが高揚すると、共通言語をよりどころとする「アラブ共同体」の統一が叫ばれました。アラビア語を話すアラブである、という属性の他は、民族・宗派の差異を政治の場に持ち出すことは許されないとされ、「宗派主義」や「部族主義」は、植民支配の残滓として敵視されました
- アラブ統一は何度か試みられましたが、各国指導者の対立により実現せず、さらには、第三次中東戦争の敗北で大きな打撃を受けました
- 世俗的ナショナリズムの退潮と共に、イスラームを旗印とするナショナリズムが期待を集めました。1979年の革命を経て、イランにイスラーム共和国が生まれました
- イラン周辺のアラブ諸国は、革命の波及を恐れ、欧米は、中東にイスラームの奔流が拡散しないよう、イラン革命を「シーア派革命」という「宗派主義」的認識に封じ込め、イラクや湾岸アラブ諸国が「スンナ派」防衛のため戦う構図を用意しました



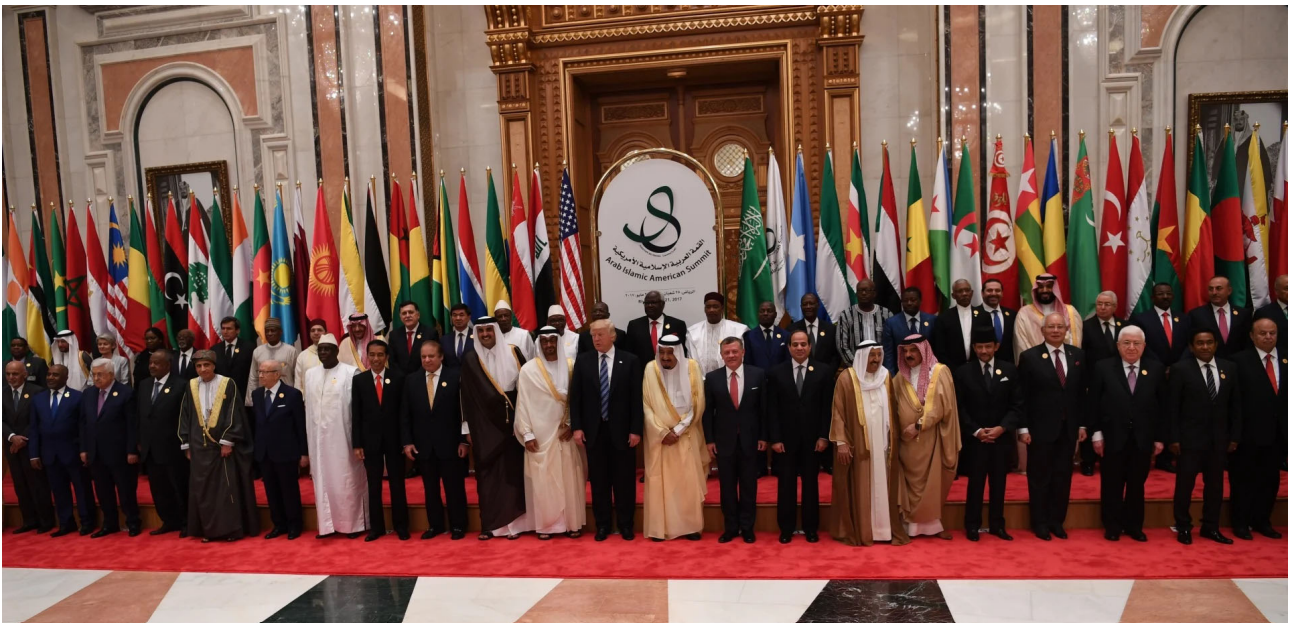


写真 「アラブ・イスラーム・アメリカ首脳会議」 リヤードで2017年5月21日撮影  
トランプ大統領は、サウジアラビアにおいて55か国の首脳と共に「アラブ・イスラーム・アメリカ首脳会議」に出席した。会議で採択された「リヤード宣言」では、「中東戦略同盟」設立構想が打ち上げられた。この構想の狙いは、イラン封じ込めを目指したアラブ諸国の軍事同盟設置であったが、イスラーム世界を宗派で分断する思考には慎重姿勢を示す国もあり、結局実現しなかった

## 7 現代の「宗派主義」

- これまでの歴史を見ると、中東における「宗派主義」、つまり多種多様な宗派集団が相互に争う「モザイク社会」という認識枠組みは、中東民衆の側で社会の分断と解体に抵抗するすべを欠いている状況で再発しているようです
- 最近では、対テロ戦争で反抗的な政権がアメリカの軍事介入を受け、さらに「アラブの春」以降の混迷から多くの国が抜け出せないでいる中、「宗派主義」は分割統治の道具として復権しています
- イラクとシリアで政権の座に着いたバアス党は、世俗的ナショナリズムを標榜し、宗派や民族の違いを問わない支持基盤を建前としていました。ところが、それぞれの大統領の出身宗派を根拠として、イラクのバアス党政権はスンナ派の政権、シリアのバアス党政権はアラウィー派の政権と、少数宗派しか代表していないとの認識が、政治宣伝によって広められました
- イラクのバアス党政権が倒れると、アメリカは「宗派主義」に基づき、宗派別に編成された統治制度を採用しました。このような制度は一度導入されると、宗派の利害に沿って政局が左右されがちで、イラクの社会統合を妨げています
- シリアのバアス党政権は、「アラブの春」で弱体化しました。シリアがそれまで、アラブ・ナショナリズムを掲げて欧米の中東政策に異を唱えてきたことから、「アラブの春」に際し、欧米メディアでは、シリアを宗派別小国家に細分化する提案が繰り返されました
- イランの域内影響力拡大に対抗するため、アメリカはイスラーム世界を宗派で分断する発想に従い、スンナ派アラブ諸国をまとめてイランに対抗させる戦略を描きました